



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	伊平屋島島尻方言のアスペクト・テンス・モダリティ
Author(s)	當山, 奈那
Citation	国際琉球沖縄論集 = International Review of Ryukyuan and Okinawan Studies(6): 37-51
Issue Date	2017-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/37388">http://hdl.handle.net/20.500.12000/37388</a>
Rights	

【研究論文】

伊平屋島島尻方言のアスペクト・テンス・モダリティ

當山 奈那

Tense, Aspect, and Modality in Iheya Island Shimajiri Dialect

TOHYAMA Nana

要旨

本稿では伊平屋島島尻方言を対象に、アスペクト・テンス・モダリティの分析・記述を行い、その特徴を明らかにした。島尻方言は完成相と継続相の二項対立型のアスペクト体系をもつ。これは首里方言と同様だが、継続相の形づくりが異なることを述べた。また、他の琉球諸語でアスペクト・モダリティを表現する上で重要な役割を果たすシテアル形式が当該方言にはないことを示し、継続相の形式（シアリオル）が客体結果や主体結果の意味まで表現する可能性を述べた。そして、新しい形式であるシアリアルキオル相当形式が文法化し、現在は、シアリアルキオル形式とシアリオル形式とが特に主体動作動詞の場合（開始後の段階）において、競合している段階であることを指摘した。

はじめに

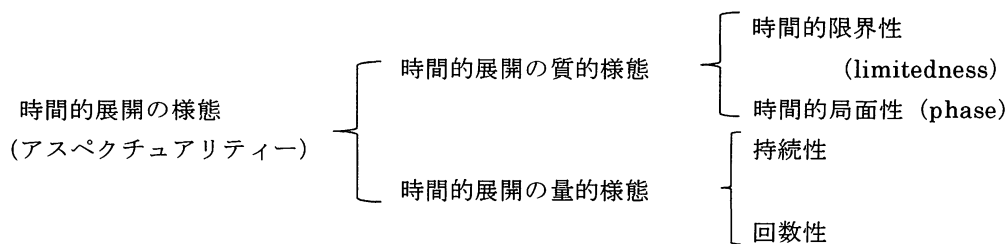
伊平屋島には、島尻、我喜屋、田名の集落が存在する。対象となる島尻集落は这其中でもっとも新しい集落である。本稿の目的は、島尻集落で話されている地域方言（以降、島尻方言）を対象に、アスペクト・テンス・モダリティ（以降、ATM）の分析・記述を行い、当該方言の ATM 体系の特徴を明らかにすることである。本稿のデータは、全て S33 年生の島尻方言話者（男性）への調査票を用いた面接調査で得たものを用いる。用例は簡易的な音声表記を用いる。問題とする文の部分は下線\_\_\_\_\_で示し、発話状況は [] 内で説明する。調査は、2016 年 3 月 2 日、3 日、9 月 4 日、5 日に島尻で実施した。用例は、日本語標準語の文を島尻方言に翻訳していただいて得た。

1. 分析の方法

動態的出来事（＝運動）の〈時間的展開の様態〉を表し分ける、機能・意味的カテゴリーとしてのアスペクチュアリティーの表現手段は、大きくは、文法的手段（形態論的、構文的）と語彙的手段に分けられる<sup>1</sup>。

工藤 1995 は、アスペクチュアリティーについて〈表現内容〉に基づき、次のような 4 分類を行っている。

【表 1】 時間的展開の様態 (工藤 1995 より)



もっとも重要なのは、質的様態のなかの〈時間的限界性〉である。これは、スルーシテイルの文法的なアスペクトの対立においても、内的限界動詞—非内的限界動詞という語彙的な側面においても、さらに、シテシマウは完遂、シカケルは未遂のような運動が完全に遂行されるか否かという派生動詞においても貫いて存在しているからである。質的様態には、時間的展開の局面性 (シハジメルは開始局面、シオワルは終了局面) も属している。

量的様態の持続性は持続的 (シバラク、ダンダン) か瞬間的 (イッシュン、トツゼン、ニワカニ) かという特徴づけ、回数性は一回的 (イチド)、多回的 (ナンドモ、ショチュウ) が属し、現代日本語の場合は主に副詞での特徴づけがある。語彙的なアスペクト (文法的なアスペクトに含まれないが、時間的展開を表現する形式) についても含めて調査し分析した。本稿では語彙的なアスペクトは紙幅の都合上、扱うことができなかったが、文法的なアスペクトについて、各形式がどのような表現内容をもつのかということ工藤の用語を用いながら分析する。

## 2. 島尻方言のアスペクト・テンス (AT) 形式の特徴

島尻方言の AT 形式には、スル、シタ、シオル、シオッタ、シアリオル、シアリオッタ相当形式が存在する。

表 1 に、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞、主体動作動詞のアスペクトによる動詞の分類に従って、それぞれの動詞のタイプによってどのような形式が存在しているか／存在していないかをまとめた。各タイプは、「開ける (主体動作客体変化動詞)」、「開く (主体変化動詞)」、「飲む (主体動作動詞)」を代表させて動詞の語形を整理する。

【表 2】 動詞の分類と AT 形式の分布

	主動作客変 (開ける)	主体変化 (開く)	主体動作 (飲む)	存在動詞 (いる)
スル				uN (いる)
シタ	akitaN	aŋaN	nunaN	

	(開けた)	(開いた)	(飲んだ)	
シオル	aki:N (開ける)	aʃuN (開く)	nunuN (飲む)	
シオッタ	aki:taN (開けた)	aʃutaN (開いた)	nunutaN (飲んだ)	uitaN <sup>ii</sup> (いた)
シアリオル	akijoN (開けている)	aʃo:N (開いている)	nuno:N (飲んでいる)	
シアリオッタ	akijo:taN (開けていた)	aʃo:taN (開いていた)	nuno:taN (飲んでいた)	

島尻方言の AT に関わる形式の特徴として、次の 3 点があげられる。

- (1) シテアル、シテアッタ相当形式が存在しない。
- (2) シアリオル、シアリオッタ相当形式が存在する。
- (3) 存在動詞のシアリオル、シアリオッタ形式が存在しない (未確認)。

次節より、各 AT 形式の表現領域についてみていく。また、シアリアルキオル相当形式も、本稿では伊平屋方言の文法的なアスペクトとして分析を行う。

### 3. 各 AT 形式の表現領域

島尻方言は、完成相と継続相の二項対立型のアスペクト体系をもつ。これは、首里方言と共通しているが、首里方言の継続相がシテ中止形に存在動詞を接続させて作られるのに対して、島尻方言の継続相はシアリ中止形に存在動詞を接続させている。工藤 (2014) は、首里方言の AT 体系は形式的には西日本方言、意味的には東日本方言のハイブリッド型と捉えている。【表 3】に島尻方言と首里方言の AT 体系をまとめる。西日本方言での相当語形をカナ表記で、標準語に対応する語形を () 内で示す。

【表 3】 島尻方言の AT 体系と首里方言の AT 体系

テンス		アスペクト	完成相	継続相
		島	非過去	シオル (する)
尻	過去	シタ (した)	シアリオッタ (していた)	
首	非過去	シオル (する)	シトル (している)	
里	過去	シタ (した)	シトッタ (していた)	

### 3-1 スル相当形式（完成相非過去形）

スル相当形式は有情物が主体になる存在動詞、un（いる）にのみみられた。（無情物が主体になる存在動詞は未調査。）スル相当形式は、①〈現在の一時的存在〉②〈反復習慣〉③〈恒常的存在〉をあらわす。テンス的に〈非過去〉をあらわし、〈過去〉をあらわす uitan と対立をなす。

首里方言の存在動詞には、シテオル相当形式' uto:n、シテオッタ相当形式' uto:tan が存在し、主に〈現在の一時的存在〉や〈過去の一時的存在〉をあらわすが、伊平屋方言では、主体動作動詞や主体変化動詞などにみられるシアリオル相当形式が存在動詞においては確認できなかった。

#### ① 〈現在の一時的存在〉

(1) je:i nama ja:ne anma: unmi.

ねえ、今 家にお母さん いる？[外に出たらよびかけられて]

N: undo:.

うん、いるよ。

#### ② 〈反復習慣〉

(2) su:ja figutu sangutu me:nafi ja:ne: un.

父は 仕事を しないで 毎日 家に いる。

(3) unu maja:ja hitti: itta: ja:ne: unja:.

その 猫は よく お前の 家に いるね。

#### ③ 〈恒常的存在〉

(4) u:mine:ja ju:ga un.

海には 魚が いる。

発話現場における意外なことを発見することをあらわす述語表現として、「uiru φu:ti:（いこそしたか？）」のような分析的な形式が次の1例のみみられた。

(5) ?ja: uiru φu:ti:.

お前、いたのか？[その人がいることにはじめて気が付いて]

### 3-2 シオル相当形式（完成相非過去形）

シオル相当形式は、①〈変化過程進行〉、②〈動作過程進行〉③〈完成相・未来〉、④〈多回・現在〉、⑤〈反復・現在〉、⑥〈習慣・現在〉、⑦〈特性〉の意味をあらわす。

#### ① 〈変化過程進行〉

(6) une une makuga afundo:.

ほら ほら、幕が 開きつつあるよ。

(7) mfendi ifiga fifanu ka:rake: uttin.

みて！岩が 下の 川に 落ちつつある。[岩が崖から落ちてくるのをみて]

#### ② 〈動作過程進行〉

(8) ai, amiru ɸunmahe:.

おや、雨が 降っているじゃないか。[窓を開けて]

③ 〈完成相・未来〉

(9) taro:ga aɸa: rokudzine jarakuɸi aki:n.

太郎が 明日 六時に 戸を 開ける。

(10) unu miseja me:naɸi ɸikama: kudzine aɸo:ɸiga aɸa:ja dzu:dzine:

その 店は 毎日 朝 9時に 開いているが、明日は 10時に

aɸun.

開く。

④ 〈多回・現在〉

時間的限界性のあるアクチュアルな運動を捉えている。多回的運動の一括性を表す。マクロなイベントとしてとらえれば、継続的である。この多回性は、述語動詞の直前にある程度副詞によって保証されている。

(11) taro:ga jarakuɸi ɸa: aki:n.

太郎が 戸を 次々に 開けている。

⑤ 〈反復・現在〉

(12) iɸin taro:ga aki:ɸiga, ɸunage:naja dziro:garu jarakuɸi aki:ssa.

いつも 太郎が 開けるが、時々は 次郎が 戸を 開けるよ。

(13) ja: saki nunumi.

お前 酒を 飲むか？

tɸidɸi nunun.

時々 飲む。

⑥ 〈習慣・現在〉

ここまで、すべて個別的、具体的な時間の中に現象する事象を捉えた場合であったが、時間的限定性の抽象化が進んだ〈反復性〉の意味を表す場合もある。

(14) taro:ja me:naɸi rokudzine jarakuɸi akin.

太郎は 毎日 6時に 戸を 開ける

(15) kunuguru me:naɸi ami ɸuissaja:.

この頃、毎日 雨が 降る。

未来の〈反復性〉を表す場合、シオル相当形式に限定される。

(16) taro:ga aɸa:kara me:naɸi rokudzine jarakuɸi aki:n.

太郎が 明日から 毎日 6時に 戸を 開ける。

⑦ 〈特性〉

(17) watta: su:ja saki nunundo:.

私たちの 父は 酒を 飲むよ。

- (18) anu jarakuŋi kusarigata:ga najo:ra: hadzine sugu aŋu:ssa.  
あの 戸は 腐れそうに なっているのか、 風で すぐに 開くよ。

### 3-3 シタ相当形式 (完成相過去形)

シタ相当形式は、動詞のタイプに関わらず①〈完成・過去〉②〈パーフェクト・現在〉③〈反復・過去〉の意味を表す例をそれぞれ確認した。

#### ①〈完成・過去〉

- (19) ŋiŋnu taro:ga du:ŋuine: uŋo:k tamun watan.  
昨日、太郎が 一人で たくさんの 薪を 割った。
- (20) wanja kinnu unu ananu nakake: utitan.  
私は 昨日 その 穴の 中に 落ちた。
- (21) uma:ne kwa:ŋinu aita:tu wa:ga kanan.  
そこに お菓子が あったから 私が 食べた。

#### ②〈パーフェクト・現在〉

- (22) kisa jarakuŋi akiti:.  
さっき 戸を 開けた?  
?N: taro:ga akitando:.  
うん、太郎が 開けたよ。
- (23) kisa kusui nuni:.  
さっき 薬を 飲んだか?  
in: kisa nunando:.  
うん、さっき 飲んだよ。

#### ③〈習慣・過去〉

- (24) taro:ga anudzibun me:nafī rokudziguru jarakuŋi akitanja:.  
太郎が あの時 毎日 6時頃 戸を 開けたよ。
- (25) gogaŋija me:nafī ami ŋu:tan.  
五月は 毎日 雨が 降った。

### 3-4 シオッタ相当形式

シオッタ相当形式は、〈過去時における話し手の動作の知覚 (直接確認)〉を明示する。1人称が動作主体になることは基本的に不可である。また、確認の仕方は〈目撃〉であるが、〈聴覚による確認〉でもよい。

形式的な側面からみて、シオッタ相当形式は、もともと、①〈過去の動作進行〉をあらわす形式であったと想定される。進行というアスペクトの意味から解放されて、②過去時における話し手の動作や変化の知覚 (直接確認) の場合にも使われるようになったと考えられる。

① 〈過去の動作進行〉

(26) ʃɪnnu: ja:ke: ke:ʃa:nu tuki taro:ja saki gunne:gunne: nunutan.

昨日 家に 帰ってきた 時、太郎は 酒を ごくごく 飲んでいた。

(27) ʃɪnuja junaha amiga banne: ɸuitan. usumasamu utu jatassa:.

昨日は 夜中、雨が 激しく 降っていた。すごい 音だった。

② 〈過去時における話し手の動作の知覚 (直接確認)〉

(28) ʃɪnnu taro:ga du:ʃuine: uɸo:ku tamun waitan.

昨日、太郎が 一人で たくさんの 薪を 割ったよ。

(29) unu sakija taro:ga nunutanjo.

その お酒は 太郎が 飲んだよ。

シオッタ相当形式が〈過去時における話し手の動作の知覚 (直接確認)〉をあらわすとき、基本的には (30) の例のように 1 人称は動作主体になることができない。ただし、直接確認した動作や変化について、話し手が覚えていないこと、忘れてしまったことを聞き手に確認する場合、疑問文の述語形式にあらわれることがある。

(30) \* unu sakija waga nunutan.

その お酒は 私が 飲んだ。

(31) wanja nu:tatu, wandzu: wakaranhiga, ʃɪnnu magiami ɸuiti.

私は 寝ていたから、私には わからないけど、昨日、大雨が 降った?

③ 〈過去の習慣〉

また、シオッタ相当形式は、〈過去の習慣〉もあらわすことができる。この場合、人称制限はない。

(32) (wanja /taro:ja/ja:ja) nkafɪja ju: u:mine ju: tuitan.

(私は / 太郎は / お前は)、昔は よく 海で 魚を 獲っていた。

(33) (wanja /taro:ja/ja:ja) nkafɪja ju: saki nunutan.

(私は / 太郎は / お前は)、昔は よく お酒を 飲んでいた。

④ 〈未遂〉

シオッタ相当形式は、実現の直前までいったが、実現しなかったことをあらわす〈未遂〉というモーダルな意味もあらわす。

(34) watta: warabi:ga na: iɸigwa:ne: kurumanu doa akitassa:.

うちの 子供が、もう少しで 車の ドアを 開けるところだった。

(35) midɟitu maɸigae: na: iɸigwa:ne: saki nunutan.

水と まちがえて、もう少しで お酒を 飲むところだった。

(36) jarakufɪga na:jo:hi:ne: aɸutassa:.

戸が もう少しで 開くところだった。[戸が開きそうになったが、結局開かなかったのを話題にして]



〈証拠に基づく過去の存在の間接確認〉をあらわす時には、「uitanba: jassaja:」のようにシオッタ形式とコピュラを組み合わせた述語形式がみられた。同じ形式は、主体動作動詞の例にもみられた(37)。ここでは、〈形跡に基づく過去の動作の間接確認〉をあらわす。首里方言なら、シテアル相当形式が表現する。

(37) unu rirekisjo ?un?fenri. unu ?fuja warabidzibun ihejane:  
この履歴書をみて。この人は子供の時に伊平屋に  
uitanbassaja: / uitanba: jassaja:  
いたんだ。

(38) aijo:, ?ma:ke: ?fannu tufi nagoja mi?i indajo:tassaja:.  
そういえば、ここに来的时候、名護は道が濡れていたなあ。  
nagobike: amiga ?uitanbassaja:.  
名護だけ雨が降ったんだね。

### 3-5 シアリオル相当形式(継続相非過去形)

シアリオル相当形式は、基本的に、〈終了限界達成後の段階〉を表す。これには、①〈主体結果・現在〉②〈客体結果・現在〉③〈痕跡〉④〈パーフェクト・現在〉⑤〈パーフェクト・未来〉⑥〈パーフェクト・記録〉⑦〈パーフェクト・経験〉がある。また、〈開始限界後の段階〉を表すものとして、⑧〈動作過程継続・現在〉⑨〈変化過程継続・現在〉⑩〈動作過程継続・未来〉⑪〈反復・現在〉⑫〈習慣・現在〉がある。

①〈主体結果・現在〉

(39) aiQ, jaraku?i af?o:ssa:.  
おや、戸が開いているね。

(40) e, gumi ?irakajo:ssa:, majaga mata ?ma:mari ?fo:ssa.  
あ、ゴミが散らかっているね。猫がまたここまで来ているね。

(41) ane magi:nu ifiga d?i:ke: uttijon:.  
あれ、大きな岩が地面に落ちている。

②〈客体結果・現在〉

(42) jaraku?i akijon:.  
戸を開けてある。

(43) anma:ga puton ha:rakahon:.  
お母さんが布団を干してある。

(44) su:ga gomi ?ittijo:N:.  
お父さんがゴミを捨ててある。

③〈痕跡〉

ここでは、話し手は〈直接知覚〉した〈間接的結果の現存〉という〈客観的証拠=状況証拠〉に基づいて、〈以前の動作の推論(判断)〉を行っている。痕跡の知覚は、〈視覚による目撃〉がもっとも多いが、触覚による場合でもよい。動詞のタイプからは解放されている。アス

ペクト的には、先行時の動作や変化は完成しているが、成立時の特定ができない。

(45) ta:gara saki nuno:ssa:.

誰かが 酒を 飲んでいるね。[ 部屋のおいがかくさいのに気づいて ]

(46) dʒi: ʃittae:, urija mata ju:bi ami ɸuʒo:ssaja:.

地面が 濡れて、これは また 昨夜 雨が 降っているね。

(47) e, gumi ʃirakajo:ssa:, majaga mata ʔma:mari ʃo:ssa:.

あ、ゴミが 散らかっているね。猫が また ここまで 来ているね。

④ 〈パーフェクト・現在〉

〈客観的痕跡の現存の目撃〉がなくなり、人称制限からも解放されると、〈効力〉が成立する。先行時の動作や変化の完成と、その後続時のなんらかの効力の現存を話し手が主体的に関係づけている。ここでも動詞のタイプに関わらずあらわれている。

(48) su:ja ki:san saki nuno:ndo:. na: numanki:ro:.

お父さんは さっきも 酒を 飲んでいるよ。もう 飲まないでよ。

(49) watta: ja:nu inuja kisa sukuno:n: sannnenme:ne bjo:ki nae:

うちの 犬は もう 死んでいる。三年前に 病気に なって

sugu sukunan.

すぐに 死んだ。

⑤ 〈パーフェクト・未来〉

(50) taro:nu kutu jatuja: aʃa:nu kondankainu me:ne: kisa saki

太郎の ことだから 明日の 懇談会の 前に もう 酒を

nuno:n hadʒiro:. 'i:e:kara ɸunko: ʃimufigaja:.

飲んでいるだろう。よっぱらって 来ないと いいけどね。

(51) nama suku iʃa jube:. mikka atune:ja unu ufija

今すぐ 医者 を 呼べ。三日 あとには その 牛は

kisa sukuno:ndo:.

もう 死んでいるよ。

⑥ 〈パーフェクト・記録〉

(52) su:ja kisa saki nuno:ssa:.

お父さんは もう 酒を 飲んでいるよ。[ レシートをみて ]

(53) une, kunu marasonnu me:bo nʃe:, taro:ja kisa

ほら、この マラソンの 名簿を 見て、太郎は もう

ihejadʒimake: ʃo:ndo:.

伊平屋島に 来ているよ。

⑦ 〈パーフェクト・経験〉

(54) wanja namamadine sankwai indʒondo:.

私は 今までに 三回 行っているよ。

ここまでは、動作・変化の〈終了限界後の段階〉の意味をあらわす用例だったが、以下の例のように、シアリアル相当形式は動作・変化の〈開始限界後の段階〉の意味もあらわすことができる。主体動作動詞や主体動作客体変化動詞であれば、〈動作過程継続〉を、主体変化動詞であれば、〈変化過程継続〉をあらわすことができる。

ただし、〈開始限界後の段階〉をあらわす下の例はすべて「シアリアルキオル(している)」相当形式への置き換えが可能である。さらに、調査時にこのような例をたずねると、話者は、はじめに「シアリアルキオル」形式で回答する。このため、島尻方言では、かつては、シヨルとシアリアルによる完成相と継続相の二項対立型アスペクトをなしていたが、シアリアルキオル相当形式が新しく生じた結果、〈開始限界後の段階〉をシアリアルキオル形式が担うようになってきていると考える(シアリアルキオル相当形式の項も参照)。

⑧ 〈動作過程継続・現在〉

(55) ane nʃendi su:ga saki nuno:nro:.

ほら、見て、お父さんが 酒を 飲んでいるよ。

(56) ane, ami ɸujo:ssa.

おや、雨が 降っている。[窓を開けて]

⑨ 〈変化過程継続・現在〉

(57) iʃiga uttijo:n.

岩が 落ちている。[崖が高くて、岩が地面に落ちている途中なのをみて]

⑩ 〈動作過程継続・未来〉

(58) ja:ke: ke:ro: taro:ga jarakuʃi akijo:nu hadziro:.

家に 帰ると、太郎が 戸を 開けているだろう。[太郎が窓を開けている(窓が開きつつある)のを想像]

(59) ja:ke: ke:nu dʒibunja su:ja saki nunon hadzi:ssaja.

家に 帰る 時は お父さんは 酒を 飲んでいるだろう。[酒を飲んでいる最中なのを想像]

なお、〈多回〉の意味をあらわす例は確認できなかった。下のように、程度副詞「ʃa:(次々に)」を入れると非文になる。〈反復〉〈習慣〉は可能であった。

〈多回〉

(60) \*taro:ga jarakuʃi ʃa: akijon.

太郎が 戸を 次々に 開けている。

(61) \*su:ga saki ʃa: nuno:n.

お父さんが お酒を 次々に 飲んでいる。

⑪ 〈反復・現在〉

(62) oto:ja tamani saki nuno:n.

お父さんは、時々 お酒を 飲んでいる。

(63) su:ja ŋikaguruja saki usagajo:ssa:.  
父は 近頃は 酒を 召し上がっているよ。

⑫ 〈習慣・現在〉

(64) taro:ja me:naf̄i rokudzine jarakuŋi akijo:N.  
太郎は 毎日 6時に 戸を 開けている。

(65) oto:ja me:naf̄i saki nuno:N.  
お父さんは、毎日 お酒を 飲んでいる。

(66) kunuguru me:naf̄i ami φujo:N.  
この頃、毎日 雨が 降っている。

### 3-6 シアリオッタ相当形式（継続相過去形）

シアリオッタ相当形式は、① 〈主体結果・過去〉 ② 〈客体結果・過去〉 ③ 〈痕跡・過去〉 ④ 〈パーフェクト・過去〉 ⑤ 〈動作過程継続・過去〉 ⑥ 〈反復習慣・過去〉 ⑦ 〈未遂〉をあらわす。

① 〈主体結果・過去〉

(67) aijo:, ?ma:ke: ŋannu tuŋi nagoja miŋi indajo:tassaja:.  
そういえば、ここに 来るとき、名護は 道が 濡れていたなあ。  
nagobike: amiga φu:tanbassaja:  
名護だけ 雨が 降ったんだね。

② 〈客体結果・過去〉

(68) taro:ga jarakuŋi akijo:mahe:.  
太郎が 戸を 開けてあったんじゃないか。[太郎が戸を開けてしまっていた(戸は開いていた)のを思い出して]

主体動作客体変化動詞の場合、述語形式を受動動詞の形にすることによって、客体結果であることを明示することができる。

(69) kinnu waga ko:minkanne: ke:tanu tukija tamunja  
昨日、私が 公民館に きた 時は 薪は  
kisa bu:ru wararijotando:.  
もう 全部 割られていたよ。

③ 〈痕跡・過去〉

(70) ta:garaga jonaha jarakuŋi akijo:tan.  
誰かが 夜中に 戸を 開けていた。[風が入ってきたのを思い出して]

(71) mata saki nuno:tassa.  
また 酒を 飲んでいたよ。[その時はもう飲んではいなかったが、酒臭かったのを思い出して]

④ 〈パーフェクト・過去〉

(72) kinnu waga ko:minkanne: ke:tanu tukija tamunja bu:ru wajotando:.

昨日、私が 公民館に きた 時は 薪は 全部 割っていたよ。

(73) taro:ga mise keʃan tukija watta:ja kisa saki ippon nuno:tan.

太郎が 店に 来た 時は 私たちは すでに 酒を 一本 飲んでいた。

⑤ 〈動作過程継続・過去〉

(74) ʃinnu: ja:ke: ke:ʃa:nu tuki taro:ja saki gunne: gunne: nuno:tan.

昨日 家に 帰ってきた とき、太郎は 酒を ごくごく 飲んでいた。

(75) ami barabara ʃu:jo:tassa:.

雨が ザーザー 降っていたよ。

⑥ 〈反復習慣・過去〉

(76) gogaʃija me:nafɪ ami ʃu:jo:tan.

五月は 毎日 雨が 降っていた。

⑦ 〈未遂〉

シアリオッタ相当形式は、実現の直前までいったが、実現しなかったことをあらわす〈未遂〉というモーダルな意味を表すことができる。この用法では、過去というテンスの意味はあらわしておらず、継続の意味もあらわさない。この述語形式はシオッタ相当形式におきかえることが可能である。

(77) an tukije wanja na: iʃigwa:ne: sukuno:tassa:.

あの時、私は もう 少しで 死ぬところだった。

(78) midʒitu maʃigae: na: iʃigwa:ne: saki nuno:tassa.

水と まちがえて、もう 少しで お酒を 飲むところだった。

### 3-7 シアリアルキオル相当形式

シアリ中止形と動詞 attsun (歩く) の分析的な形式である。ここでの補助動詞 attsun (歩く) は、主体の制限から解放され、語彙的な意味を失っている(意味の喪失 (semantic bleaching))。また、動作進行という新たな文法的意味を獲得しており、用例 (79) のように音韻縮約が起こっている。これらの点から文法化を起こしているとみなすことができる。① 〈動作過程継続〉 ② 〈変化過程継続〉 ③ 〈多回〉 ④ 〈反復・現在〉 ⑤ 〈習慣・現在〉 をあらわすことができる。〈開始限界達成後の段階〉を表す。

① 〈動作過程継続〉

(79) jaraʃuʃi akie: attsun / akja:tsun.

戸を 開けている。[今何をしているのかと質問されて]

(80) ane nʃendi ʔja:ga hantu anma:ga jaraʃuʃi akie: attsundo:.

ほら 見て、お前が やらないから、お母さんが 戸を 開けているよ。

② 〈変化過程継続〉

(81) kaidʒo:ke: ʃiʃan dʒibunja makuga aʃi attsu:nu hadʒiro:.

会場に 着いた 時は 幕が 開きつつあるだろう。[幕が次第に開いていくのを想像して]

(82) ifiga uttie attsun.

岩が 落ちているよ。[崖が高くて、岩が地面に落ちている途中なのをみて]

③ (多回)

(83) taro:ga jarakuŋi ŋa: akie: attsun.

太郎が 戸を 次々に 開けている。

(84) su:ga saki ŋa: nune atfun.

お父さんが 次々に お酒を 飲んでいる。

④ (習慣・現在)

(85) taro:ja me:nafī rokudzine jarakuŋi akie: attsundo:.

太郎は 毎日 6時に 戸を 開けている。

(86) su:ja me:nafī saki nune: atfun.

お父さんは 毎日 酒を 飲んでいる。

⑤ (反復・現在)

(87) taro:ga kaže hiŋatu saikinja dziro:garu jarakuŋi akie: attsun.

太郎が 風邪を ひいたので 最近は 次郎が 戸を 開けている。

(88) oto:ja tamani saki nune: atfun.

お父さんは、時々 お酒を 飲んでいる。

(89) tara:ja iŋin tŋu sugue: atfun.

太郎は いつも 人を 殴っている。

### 3-8 シアリアルキオッタ相当形式

シアリアルキオル相当形式とテンズ的に対立している。① (動作過程継続) ② (反復習慣・過去) をあらわす。〈開始限界達成後の段階〉を表す。

① (動作過程継続)

(90) jarakuŋiru akije: attsu:tan.

戸を 開けていた。[さっき何をしていたのかと質問されて]

(91) hanakoga taro: sugue: atfu:tan.

花子が 太郎を 殴っていた。

(92) ŋinnu: ja:ke: ke:ŋa:nu tuki taro:ja saki gunne:gunne: nune attsutan.

昨日 家に 帰った とき、太郎は 酒を ごくごく 飲んでいた。

② (反復習慣・過去)

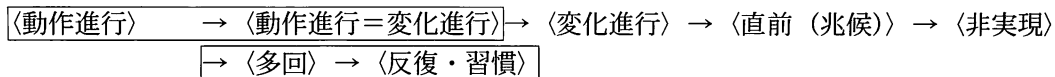
(93) taro:ga anudzibun me:nafī rokudziguru jarakuŋi akie: attsu:tanja:.

太郎が あの時 毎日 6時頃 戸を 開けて いたよ。

(94) su:ga wakahanu dzibunja me:nafī saki nune: atfu:tan.

父が 若い 時は 毎日 酒を 飲んでいた。

工藤（2001）は、西日本方言のシオル形式の文法化について、下のふたつの経路を提示している。ひとつは〈未来〉へと向かうメインルート、もうひとつは〈反復性〉に向かう経路である。



工藤は、西日本のシオル形式の文法化の出発点が動作動詞である可能性を指摘しているが、シリアルキオル形式の文法化も、「attsun（歩く）」という動作動詞＝非内的限界動詞を出発としている。そのため、上記のアスペクト形式の発展経路の図はシリアルキオル形式の文法的発展を考える上でも参考になると考える。シリアルキオル形式は、語彙的制限から解放されながら、同一の時空間での〈多回〉を経て、異なる時空間における〈反復〉へと向かったと捉えることができる。（上記の図の□が島尻方言の表現領域である。）

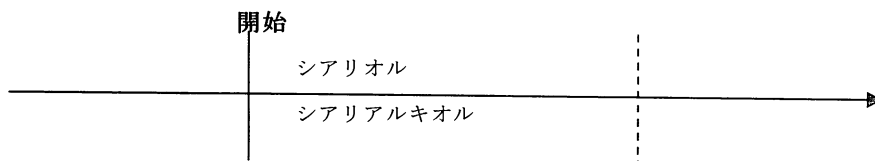
### まとめ

かりまた（2016）では、オモロ語の AT 体系について、スル相当形式とシオル相当形式（シ中止形に存在動詞が接続した形式）の二項対立型であったと述べている。首里では、その後、シテ中止形に存在動詞が接続したシトル相当形式が新しく入ってきた結果、張り合い関係のなかで現在の首里方言の AT 体系を形成していったと考える。

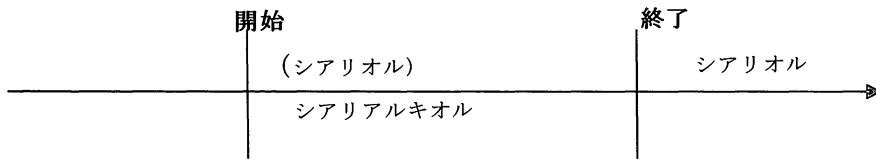
なお、シアリ中止形は、オモロ語にも存在している（かりまた 2016）。島尻方言の AT 体系の発展経路について次のようなシナリオを想定することができる。島尻方言では、首里方言のようなシトル相当形式を発生させなかったか、あるいは、一時的に存在していたが用いられなくなった可能性がある。シアリオル相当形式が継続相としてシオル相当形式の完成相とのアスペクト的な対立を形成した後、シトル相当形式よりさらに新しい形式であるシリアルキオル相当形式が文法化し、現在は、シリアルキオル相当形式とシアリオル相当形式とが特に主体動作動詞の場合〈開始後の段階〉において、競合している段階である。

【図】 動詞の内的限界性とシアリオル、シリアルキオル相当形式の分布

○主体動作動詞＝非内的限界動詞



○主体動作客体変化動詞＝内的限界動詞



なお、シテアル相当形式の欠如が他の ATM 体系に関わる形式があらわす意味とどのように関連しているのかについて、本報告までには十分に調査分析をすることができなかった。これまで久高島方言でシテアル相当形式がないとの報告がなされている（池間2009）。久高島方言ではシヨッタ相当形式が直接確認をあらわす意味まで発展しておらず、過去の進行をあらわす場合に用いられる。島尻方言のシヨッタ相当形式も過去の進行を表すことができ、首里方言と比較すると、直接確認の例でシヨッタ相当形式があらわれにくい。今後の課題としたい。

注

<sup>i</sup> 工藤真由美 1995,pp31

<sup>ii</sup> 形式上は、「uN（居る）」の第一中止形にさらに uN がくっついて融合した形式 uiN の過去形である。そのため、シオッタ相当形式とした。現在までに utaN（シタ形式）は確認できていない。

参考文献

- 池間恵理子(2009)「沖縄県南城市久高方言の動詞のアスペクト・テンス・ムード」琉球大学大学院修士論文。
- かりまたしげひさ(2016)「琉球諸語のアスペクト・テンス体系を構成する形式」『琉球諸語と古代日本語－日琉祖語の再建にむけて－』pp125-147, くろしお出版, 東京。
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現』ひつじ書房, 東京。
- 工藤真由美(2001)「アスペクト体系の生成と進化」『ことばの科学』10,pp117-173, むぎ書房, 東京。
- 工藤真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房, 東京。